

■（１３５）新聞も教育も「志産業」、米国記者のメモに共感

先輩記者が、発行したばかりの「朝日新聞社 CSR 報告書・会社案内」で、米国の地方新聞社を訪ねた話を紹介していた。辞めるかどうか迷った記者が自席に貼った張り紙が目にとまったという。「You are not here to merely make a living（食うためだけに記者やってんじゃない）」とあったそうだ。

約２５年前の選択を思い出した。造船を学ぶ理系の学生だった。同時に、社会的に弱い立場の人たちが置かれている状況にも関心があり、友人に誘われ、他大学の社会学講座にも勝手に顔を出していた。いざ針路を決める際に、悩んだ。当時はバブル経済で、金融・不動産業界が潤っていたころ。同じ学科の大半は、コンピューターシステムの拡充を図っていた金融業界を選んだ。確かに待遇を含めて魅力的だったが、「弱者に直接寄り添いたい」との思いが勝って、新聞社を選んだ。

自らテーマを探して自ら読者に訴える仕事を、同僚記者は「志産業」と表現する。その志を忘れていないか。米記者の張り紙で自問自答した。

朝日 Teachers' メールが創刊３年を迎えた。中身の充実に協力いただいている教育関係者が一堂に会した。一人一人の思いを聞いて確信した。同じ「志産業」の方々だ、と。（山）